



はまなす季刊

医療法人はまなすHP ▶▶▶ <http://www.hamanasugeka.com>

医療法人
はまなす **篠路はまなすクリニック**

〒002-8024 札幌市北区篠路4条9丁目12番45号
TEL (011)776-3030・FAX (011)776-3001

医療法人
はまなす **はまなす医院**

〒061-3284 石狩市花畔4条1丁目141番地1
TEL (0133)64-6622・FAX (0133)64-6555



アオバト

2024年6月 石狩市厚田区にて撮影(工藤 立史)
集団で海水を飲む習性があります。ミネラル補充が目的のようです。6月に本州から渡ってきて、秋にはまた南下します

巻頭言

風力発電の功罪

理事長 工藤 岳秋

昨今、地球温暖化対策として、風力などの再生可能エネルギーが脚光を浴びています。陸上に風車が立ち並ぶ石狩湾新港でも、この1月、沖合で洋上風力発電所が商業運転を開始しました。

産業活動に電気は必須であり、病院でも大量に消費しています。例えば血液透析を週3回行くと、患者さん一人に対して戸建て住宅1日分を超える電力を要します。温室効果ガス削減が求められる中で、風力発電の普及は私たちにとっても「追い風」です。

ただ風力発電設備が環境に悪影響を与えることもあります。後志地方では国有林での風車の建設に対して、高山植物の保護や土砂災害防止の観点から反対運動が起き、計画が縮小されました。オジロワシなど絶滅危惧種の野鳥がプロペラに衝突死する事例も報告されています。

拙速に風力発電を推進した挙げ句、失った自然の重大さに気づく、という結末は避けねばなりません。設置場所や風車の形状などに工夫を重ね、真に「地球に優しい」発電を目指す必要があるでしょう。

はまなすの 「四本柱」

理事長 工藤 岳秋

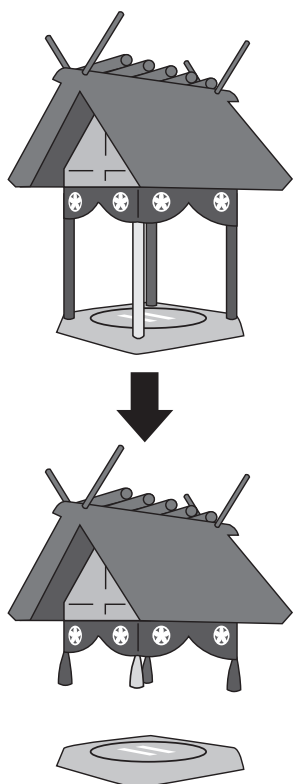


今夏、40数年ぶりに大相撲札幌場所のチケットを取った。巡業と呼ばれる地方興行であり、テレビで中継される本場所とは雰囲気やスケジュールが違うが、相撲を生で見られるというだけでワクワクする。初めて足を運ぶ妻と息子たちは、力士が土俵上でぶつかり合う様子を見て圧倒されるに違いない。

巡業では簡略化されているのだが、本場所では土俵の上空に、青、赤、白、黒の房がぶら下がった神社のような立派な屋根が吊り下げられている。屋内にも関わらず屋根があり、しかも宙に浮いていて奇妙なのだが、これは「屋根」と呼ばれ、元々は土俵の四隅に一本ずつ立つ柱に載せられていた。江戸時代まで土俵は屋外にあったため、雨風を防がなければならなかったのだ。その後近代にかけて、相撲は神事に擬せられ、格式を備えるようになる。各柱には四季を表す色の布が巻かれて土俵の守護神を宿らせた。

東 青	青竜神 <small>せいりゅうじん</small>	(春)
南 赤	朱雀神 <small>すざくじん</small>	(夏)
西 白	白虎神 <small>びゃくこじん</small>	(秋)
北 黒	玄武神 <small>げんぶじん</small>	(冬)

明治42年、東京に国技館が落成し、土俵と共に屋根と四本柱はそのままの形で建物の中に入った。が、昭和27年、来るべきテレビ放送の準備のため、視野の妨げとなる四本柱は廃止され、屋根だけが残されたのである。守護神は四色の房に乗り換えて、柱の代わりに屋根を支えることとなった。



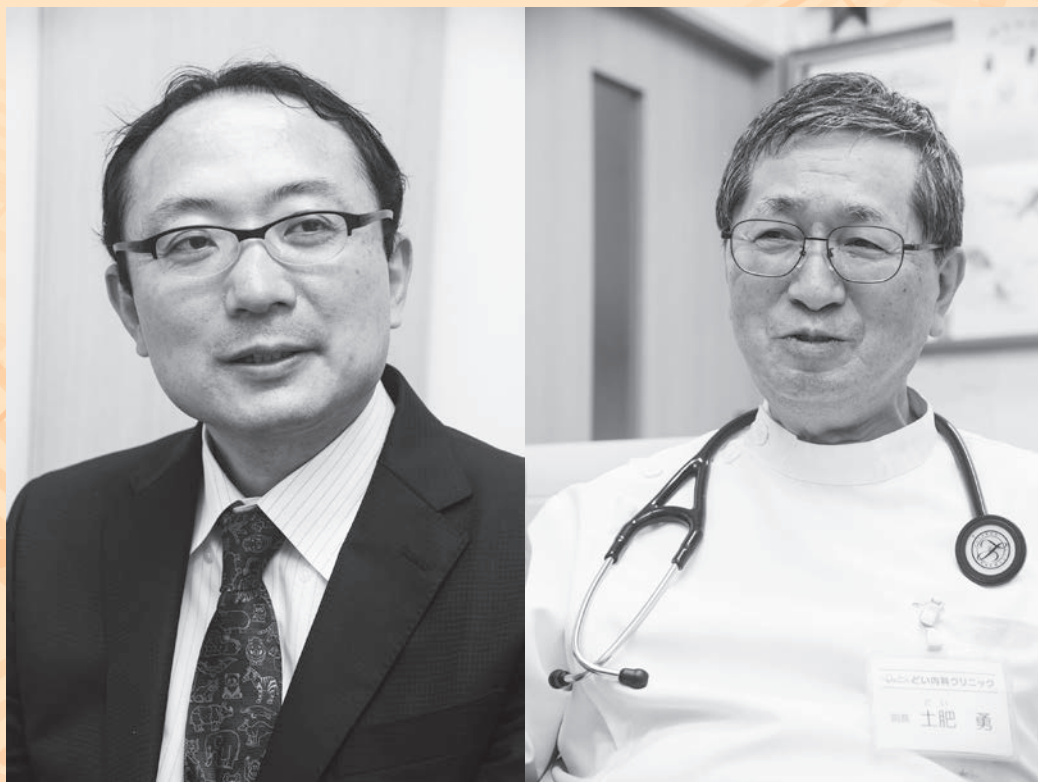
話は変わるが、はまなすは30年前の創業以来、透析医療を中心に据えるとともに、会長と私の専門である外科を標榜し、虫垂炎、胆石症、胃がん、大腸がんなどの手術を日常的に手掛けてきた。立史副理事長が開設した腎臓内科は10年目を迎え、すっかり地域に定着している。そして今春、内視鏡のエキスパートである山本純司消化器センター長をお迎えし、新たに消化器内科の歴史が始まった。これらの専門性は、はまなすにおける四本の「柱」と言い換えることができる。

私たちは日頃、感冒、胃腸炎、生活習慣病など軽症が大多数である診療の中で、重症化する可能性のある病気を見逃さないようアンテナを張り、持てるスキルと設備を駆使して、可能な限り自院で検査や治療を行うようにしている。石狩・篠路地区にお住まいの方にとって、高次医療機関はどこもやや遠く、はまなすで医療を完結させることが地域への貢献になる、という認識だからである。

これからも独り相撲を取ることなく、四本柱が協働してより大きな力が発揮できるよう努めていきたい。

「どい内科クリニック」を訪問。 音楽を通じたかわり

2024年7月11日
副理事長 工藤 立史



ど い いさむ
土肥勇先生は北区新琴似で内科医院を開業されています。特に呼吸器疾患がご専門で、時々当院より患者さんを紹介して診ていただいています。

札幌市医師会の理事としてもご活躍中です。

平日の夕方、まだ診療中にもかかわらず面会させていただきました。

私と土肥先生との出会いは2005年に遡ります。私が札幌社会保険総合病院（現JCHO札幌北辰病院）の研修医で、土肥先生は呼吸器内科医として勤務していました。私が学生時代にパイプオルガンサークルでオルガンを弾いていたことをお話ししたところ、何と土肥先生もオルガンを演奏することでした。キタラの演奏会で度々お会いするなど、仕事よりも音楽を通じて接する機会が多かったように思います。

2017年、私は自宅に本格的なパイプオルガンを設置しました。土肥先生にお知らせしたところ一度弾きにきたいとのことでしたが、コロナ禍の中でなかなか実現しないまま時が経ってしまいました。

時が流れて2023年11月、札幌市内の教会で開かれたオルガンスイタルを聴きに出かけました。そこに土肥先生もいらしたことが分かったので、その演奏会の奏者は富田一樹さん。バツハ国際コンクールオルガン部門で第一位を獲得した世界的なオルガニストです。その富田さんが、一般市民向けにオルガンの出稽古にも来てくださるとの情報を耳にしました。早速連絡をとって我が家でレッスンを受けられることになり、そこに土肥先生にもご参加いただけることになりました。富田さんと土肥先生が同時に訪れるなど大変嬉しいことです。かくして3月24日、

我が家で富田さんのレッスンが叶いました。

北大医学部61期の土肥先生は医師としては大先輩ですが、音楽という共通の趣味で交流させていただき大変光栄に思っています。今後もし指導いただくとともに、音楽を通じて交流を深めたいければ幸いです。

土肥勇（どい いさむ）先生 ご略歴

1985年、北海道大学医学部卒業、北大第一内科入局。市立札幌病院にて研修し、北大病院で呼吸器・血液疾患などを学び、基幹病院の勤務を経て2010年4月新琴似に「どい内科クリニック」を開業。専門は内科一般、呼吸器内科、胃腸内科、糖尿病内科。
資格…総合内科専門医、呼吸器専門医、産業医



▲我が家のパイプオルガンの前で撮影。
中央が富田一樹さん、右端が土肥先生。



「ミッデルハルニスの並木道」

篠路はまなすクリニック 消化器科センター長 山本 純司

大学の春休み、同期の菊地君（現・菊地

内科呼吸器科）、盛一君（現・国立成育医療研究センター）と三人でヨーロッパ旅行に行ったのは、ちょうど30年前になる。

まだインターネットが普及する前の時代。午前中は移動に充て、その日の目的地に着いたらまず宿を探すことから始まる日々を送った。英国はロンドンからヨーロッパ入りし、帰国便が出る3週間後までに列車やバス、フェリー（英仏トンネルが完成する前のことだ）でイタリア・ローマまで移動する、という行き当たりばったりの旅である。国境を越えるたびに、共通通貨ユーロも無かったのでまずは通貨の両替が必要であった。

最初に訪れた英国のハイライトはもちろん大英博物館で、古代オリエント彫刻が一番だったと当時の日記にある。

今回の本題はその翌日、ナショナル・ギャラリーを訪れた時のこと。何の予備知識も無く館内を歩いていた私は、ある見慣れた絵画を見つけて仰天した。それが「ミッデルハルニスの道」（メインデルト・ホッペマ、1689年）である。

旅行からさかのぼること9年、中学一年生の夏休みの美術課題は名画の模写であった。美術の教科書に掲載されている絵画数点から好きなものを選び、画用紙サイズに水彩具で模写するというもので、当時の私が選んだのがこの作品にな

る。

中世ヨーロッパの並木道が描かれており、中央に描かれた道路には馬車のものである轍が刻まれ、街道に沿って細く高い木々が並ぶ。右手はオレンジ色の屋根の建物と畑、左手は水路があり、遠くにオレンジ屋根の町並みと、尖塔が見える。遠近法が存分に駆使された構図に、中央付近が明るく辺縁が暗めに描写される配色、ホッペマの最高傑作の一つと評されるようだ。

とはいえ、模写のやり方なんて授業では習わない。画用紙に1センチ角のマス目を書き、美術の教科書にも同じコマ数のマス目を刻むことで構図を完璧に模写する、という方法は自分で編み出したと記憶している。

油絵と違い、水彩具だと暗く彩色した所を明るく修正するのが難しいので、明るい所から塗り始める必要がある。そういうわけで絵の半分を占める空を描くところから始まったが、大部分を占める雲の塗り分けが一番大変だった。

そうして完成した絵は学内で掲示されるくらいの評価を受けたのだが、いざ実物を見てみると、中学の私がいくつか勘違いをしていたことに気がついた。

画の中央でこちらに向かって手を挙げていると思っていた人物が、実際には手を挙げているのではなく、ライフル銃を担いでいること。その人物の傍らに佇む

仔犬は、実は大きな犬（下半身は件の人物の後ろに隠れている）だったこと。つまり、この人物は仔犬を連れた旅人などではなく、猟犬を連れて狩猟に出かける狩人だったのだ。

それ以外にも実際に描いていて不明瞭だった街道両脇の暗めの部分（なにしろ見本は美術の教科書の半ページサイズである）が良くわかり、見れば見るほど興味深い。私はこの絵の前でしばらく動けなくなってしまうのであった。

私が絵画の道に進むことはなかった。大学時代はペン画を数点書いたものの、医者になってからはカルテや所見用紙にスケッチを記入する程度である。が、40年ほど前に描いたこの絵のことを、旅行のエピソードも合わせさせて私は結構気に入っているで紹介させてもらった。

今ではインターネット上で、ホッペマのこの作品をいつでも見ることができるよう。いつの間にか邦題が「ミッデルハルニスの並木道」に変わっていたことを今回この文を書くにあたって初めて知った。

それにしても、この絵を選択した当時13歳の自分を褒めてやりたい。難易度の高い肖像画なんぞを選んでいたら、今頃は人目につかない所に厳重に秘匿する羽目になっていただろうから。

～感染対策の勉強会が行われました～ 山田 尚子

6月20日はまなす医院透析ラウンジで「医療スタッフみんなで学ぶ外来感染対策」と題するビデオ勉強会を行いました。コロナ感染が5類となり、当院でも陽性率は低下しています。しかし、私たちが注意しなければならないのはコロナだけではなく、



基礎疾患があることで感染リスクが高まることを意識していなければなりません。

今年度の感染対策委員会の目標は「院内感染対策を徹底し患者、職員を感染から守り適宜、マニュアルの見直しを行う」です。患者、職員の健康管理が大切であり、症状の観察（発熱、気道症状、消化器症状など）が感染リスクを低下させることを学びました。そして患者、職員へワクチン接種を促し、マスクの着用、手洗いをしてもらうことでさらに感染へのリスクを減らすことができます。感染防止の基本を再度、確認することができました。

医療安全の勉強会を開催しました -

野口 公貴

6月27日篠路透析ラウンジにて多職種連携に関する勉強会を開催しました。内容の要約は次のようなものです。
「医療は一人の患者さんに対して多くの職種が関わっています。医師、看護師、患者さん本人、家族も含めて連携をとることによって安全な医療を提供することができます。年齢・経験年数・職種もバラバラな事が多いチーム医療では、立場の違いや嫌われたくないといった思いから発言することが難しい人もいます。しかし患者さんにとって何が正しいかを明確にし必要時にははっきりと主張することが大切です。その為に、適切なコミュニケーションを図り意見を言いやすい環境を作ることが大事です。」

病院全体がより良いチームとなれる様勉強会で学んだことを生かしていきたいと思います。



篠路はまなすクリニック 野口 公貴

ゲーム界にもインターネットが活用され目の前にいる友人のみならず世界中の誰とでも楽しめる時代へと進化を遂げ、ナマの声による会話や文字を打ってコミュニケーションをとりながら楽しめるようになった。

ゲームから長らく遠ざかっていた私もコロナ禍がきっかけでインドアでのゲーマーへと戻っていった。そんなおり、先日ゲーム内で仲良くやり取りしている方（お互い札幌近郊に住んでいる事は明かしており名前はもちろん知らない異性）から突然 SNS でメッセージが来た。「先日海外旅行に行ったのですがお土産を買ってきたのでお渡ししたいので直接お会いしませんか？」という内容だった。お世話になっているといっても所詮はゲーム内の事で、顔も知らない私に海外からわざわざお土産を買ってきてくれた嬉しさと驚き、同時に人見知りで初対面の人と話すのが苦手な私は戸惑いもあったが意を決して会う事にした。

札幌のとあるカフェで待ち合わせをして緊張するなかいざ会ってみると人見知りな自分が嘘のように話をすることができた。そこにはゲーム内で築いていった確かな友人関係があったからと思う。

今もあえて本名を聞いたりせずゲーム内の名前呼び合い、たまに会っては趣味やゲームの話に花を咲かせ不思議な距離の友人関係が続いている。

頸なし鶏マイク―甦生後に生きかえることの光と影―

脳死とされる患者が自発的に手や足を動かすことがある。これは1984年に脳神経外科雑誌(Neurology)に報告されラザロ徴候と名付けられた。

「ラザロ」は聖書に登場するユダヤ人でイエスキリストの友人であった。彼はイエスによっていったん死より蘇らされたとされているが、キリスト教以外の世界でもその名は後世に知られている。近年はB級のホラー映画にもラザロという名が使われており死者が甦るというテーマは小説や映画にとってひとつのジャンルである。

今日では純医学的に脳死者から心臓移植をすることによって重症な心疾患の患者を救うことができる。だが、ドナーの側からすれば甦るチャンスが完全に奪われてしまうわけで無条件に命が再生されることはない。今後、脳の再生医学の発展がまたれるところであろう。

脳死にまつわる逸話に「首なし鶏マイク」の話がある。

1945年9月10日、アメリカのコロラド州の農

場で一羽の鶏が首をはねられた。普通ならそのまま絶命するはずが、その鶏は首のないままふらふらと歩き回り、羽繕いをするなどそれまでと変わらないしぐさをみせた。科学者は驚きを隠せずユタ大学にもち込まれて調査が行われた。それによると頸動脈が凝固した血液でふさがれ、失血が抑えられていたのではないかと推測され、歩くことができたのは脳幹と片方の耳が残っていたためであるとされた。

この件は地元紙に載って世間に広まり、やがて大手雑誌の「ライフ」にも紹介されて全米に広く知られるようになる。鶏はマイクと名付けられて見世物小屋に出され、ニューヨークをはじめアメリカ中を興行にまわってお金を稼いだ。

首のないマイクは自ら食べものを取れない。飼いがスポイトで水と餌をあたえ注射器で粘液を除去していたのが、1947年3月、最終的に食べ物のどに詰まって窒息死した。いつものスポイトが用意されていなかったのだ。この事例は死後首がないまま最も長生きした鶏としてギネスブックにも記録されている。(以上ウィキペディア)

マイクのケースはヒトにも施される胃ろうからの栄養が食道経由に置き換わったもののようだ。しかし首のない鶏がその辺の足元を歩き回るのは気色悪い。私ならそんなグロテスクな姿をわざわざお金を払ってまで見たいとは思わない。

永遠の命を得ることは人類畢生の夢である。だが永遠に続く人生が常にハッピーであるとも限らない。ギリシア神話には神から永遠の命を授かった男がやがて、老い、が訪れたとき老いさらばえたまま生き続けなければならないことを嘆いた、という逸話がある。若さを神に願いそびれたのである。

限られた命であればこそ、フィジカルにも、メンタルにも、豊かな生活を過ごし、健康寿命を生き切った後に速やかに生を閉じたいと願うものである。だが生きるとは先の分からないことなのだろう。せめて「今」を大切にしたいと平凡な起結におちついている。

昇格しました！



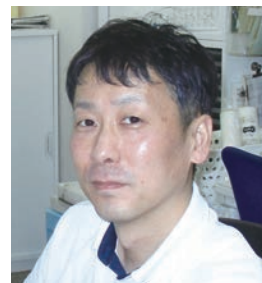
篠路はまなすクリニック
看護副師長
松井 かなえさん



篠路はまなすクリニック
臨床工学技士 主任補
末松 由多さん



篠路はまなすクリニック
臨床工学技士 主任補
山口 あかりさん



篠路はまなすクリニック
総務 主任補
永田 裕士さん



新しく入りました！



篠路はまなすクリニック
臨床工学技士
小野寺 愛香さん



篠路はまなすクリニック
臨床工学技士
長野 拓斗さん



篠路はまなすクリニック
看護師
熊谷 由加さん



篠路はまなすクリニック
庶務
佐藤 美佐子さん

篠路 ▶ 石狩

異動しました！



はまなす医院
臨床工学技士
山本 陽一さん

編集後記

はまなす医院に入職して13年、季刊誌に携わり9年、今年人生の転機が訪れた。昨年起業した息子には「応援するよ！」と伝えたが、まさか私も一緒に働くことになるとは思っていませんでした。決断するには様々な葛藤があったが、この先親子で働ける人生に感謝し精一杯できる限りの事をしようと思う。皆さん大変お世話になりました。

(Y・S)